

未佑のうなじ描きたい

蜜瀬かえで 著

今日、美術史の授業で初めて見る感じの絵を見た。

まあ、あたしは絵を描くのは好きだけど、有名な絵とかそういうのは全然知らないから、こういうのも実はよくある題材なのかもしれないけど。

あたしには結構新鮮で。

たしか、ルノワールだか、レンブラントの絵だとかビデオの間延びしたナレーションが言ってた気がする。色の塗り方があたしの好きな感じだったから、たぶんルノワール少女の頭部。

人物画で顔じゃなくて、後ろから見た頭の絵。

こういうの、初めて見た。

それであたしもすぐに描きたくなった。

と、いうことはつまり。

あたしが描きたいのは誰でもない、もう未佑のことだけなので。

もう、ビデオとかどうでもよくなって、ノート取ってる振りしながら、記憶の中から未佑の後ろ頭の方を思い出そうとしたのだけ。

そういえば、あたし、未佑の頭をこう、見下ろす角度で見たことってなかったなあということに気がついて。

うーん。

横顔とかなら結構見るんだけどなあ。

後ろ。後ろか。

という感じに、記憶の中の未佑の見たことある角度から、今ほしいのと同じような具合のを探してたら。

……。

記憶を探る目が、ちらちら、行ってしまうトコがあつて。なんか、こっちメインに描きたいなあ、って気が強くなつてきて。

まあ、言ってしまうと首のあたりなのだけど。

うなじ。

未佑の。

描きたい！

というか、未佑の首つてき、ほんとキレイなんだよ。

いつもは髪下ろしてるから隠れてるんだけど、料理するときとかはゴムでくくってるから全部じゃないけど、ちらっと見えるのが、白くてさあ。

そう、そうそう。こんな感じ。

ノートにはもう一枚記憶デッサンができあがってて。

でもなー。

たしかに、このチラリと見える感じも、色っぽいんだけど。

できれば、もっと、こう、がつつり。

描きたい。

でも。

見たことないんだよー。

頭を抱える。

未佑ってば、こういうちらちら見える分には気にしないっぽいんだけど、あんまり肌を出しすぎるのは苦手っぽいから。

見たことないんだよー。

困った。

別に想像でだったらいくらでも描けるんだけど、あたしの描きたいのは想像の未佑じゃなくて、本物の未佑なわけ。

くう。

このビデオが終わるまであと、20分くらい。

これが終わったら10分休みだから、未佑とこいくとしたら、その時だ。

ただ、大きな問題があつて。

「未佑！ ちょっとうなじ描きたいから見せて！」

「くっっ！」

あ、かんとんに目に浮かんだ。

未佑、顔真っ赤になって、すごい照れ怒りしながら、

「おバカ！」

……うわー。

そいでもって、見せてくれるわけないやつだ。

下手したら前みたいに変態呼ばわりされてしまう。

くうっ。あたしはただ、未佑のキレイなうなじを描いて

みたいだけなのに！

もしかするといわゆるこれが芸術家の苦悩というやつ

なのかもしれない。

確かに、苦しいし、悩ましい。

……さて、ではあたしはどうやって未佑のうなじを見れ

ばいいんだ？

あきらめるといふ選択肢はもちろんなし。

そしてできれば、次の休み時間には決行して、次の授業

中で描きたい。

うーん。

と、腕組みして視線を上げたところで、

「お」

目に入ったのは、ぼんやり続いた絵画史のビデオで、今はもうさつきとはもう違う絵になったのだけど、

「これだ！」

あたしは、あたしはおもわず身を乗り出して。

授業中だったので、静かにしろと、普通に怒られた。

\*\*\*

「未佑未佑未佑！」

「わ、玉置。どうしたの？ まだお昼じゃないけど？ 今

日のお昼前は座学の日じゃなかったっけ？」

「うん。そういうのは、置いというて」

「へ？」

面食らってる未佑に、

「未佑さ、三つ編みとか、興味ない？」

「え？？ 何、一体？」

「興味ある？」

「や、そんな、いきなり言われても……」

「実はあたし、今、ものすごく、ほんと珍しいくらいものすごく。未佑の髪三つ編みにしたい！」

「……どしたの？」

「いやいやいや、どうもしない、どうもしないからお願い！ あたしに髪を編ませて！ そうじゃないと、このあと授業、あたし絶対ムリだから、ほんとムリだから、この通り！」

「べつにいいんだけど……」

さすがの未佑も若干引いちゃってるけど。

よしっ！

怒ってもないし、嫌がってもない！

さすが、ルノワール！

世界的な巨匠は、やつぱりすごい。

そうだよ。「うなじ見せて」がダメでも、髪結わえさせてだったら、何も問題ないじゃん。

友達同士でお互いにヘアアレンジしあうって、実はなにげに前からやってみたかったことだし。一石二鳥。

よし。そうと決まれば、

「ほらほら、未佑、座って座って」

「いいけど、玉置、休み時間あと5分くらいで終わっちゃうよ？」

「大丈夫。3分あれば十分」

伊達にあたしも髪が長い訳じゃない。

三つ編みだって、時々したりするし。

朝の身支度で極めた速度で。

あたしは未佑の髪を結ってみせる。  
それで、

「心おきなく、うなじを！」

「え？」

「なんでもない。なんでもない」

「そう？」

ヤバ。

未佑の視線が疑わしそうになってきた。

でも、まだ大丈夫。

「……ねえ、玉置」

「うん？」

「もしかしてなんだけど。わたしの……その……うなじ……

…見たかったりするの？」

大丈夫ではなかった。

「ななななんのこと、かな？」

「うわー。わかりやすい」

「……先に言っってもいい？」

「何？」

「ごめんなさい」

「……それで？」

少し、目が怖い。

「未佑のうなじ描きたくて、少し嘘つきました」  
「うん。で？」

「それでも描きたいです」

そこで未佑は、一回嘆息して。

「休み時間、もう終わりだよ？」

あ、これ、ダメなやつだ。

と思ったら、

「来て」

席を立った未佑が言いながら、教室の奥の方へ、窓の方へ歩いていく。

え？

思いつつ、言われるまま着いていくと、

窓にかかる夏の窓に真っ白なカーテンをめくって、未佑が手招きしてくる。

え？ なに？ もしかして？

「……うれしそうな顔しないの。ほら」

そしてそのままカーテン後ろに入ると、

「わたし、こういうの、あんまり気が進まないんだからね？」

「うん」

「今日だけだから」

「うん」

「描いても、人に見せるのは絶対なしね？」

「うん」

「わかってる？」

「わかってる」

「……はあ」

未佑はまたため息をつきながら、あたしに背を向け。  
さりと、と。

右手でその毛質の細い髪を右側にかき寄せた。  
教室とカーテン1枚隔てた夏空の光の下で。

白にほんのり赤みが差していたのは。

日射しのせいだけではなかった。

\*\*\*

「で、これは……何？」

「今日渾身の一枚」

「うん。それはさっき聞いた」

「」

カーテンの向こうから手招きしてる未佑の絵